

## 会議結果報告書

令和7年12月1日

会議の名称	第1回 舞鶴市発達支援体制検討会議	
種別	<input type="checkbox"/> 附属機関 <input checked="" type="checkbox"/> 懇話会等	
開催日時	令和7年10月30日(木) 14時~16時	
開催場所	舞鶴市中総合会館3階 集団健診室	
出席者	委員:小谷裕実、四方あかね、橋本由紀、阪口靖敬、金子亜佑美、石黒健太 関係者:内藤信雄、楠崇智、仲川真広、足立典子、梅田めぐみ、村尾茜 事務局:松本真俊、瀬野勝久、尾橋淳子、飯田美和、野田諭史、日下部亘、岡本康憲、鎌部晶子、後野香織、小森昌子、栢分美香、真下知子、堀井由美子、岸田由紀子、長沢凜、植田葵、内藤恵美)	
議題	(1)令和6年度舞鶴市発達支援体制検討会議の報告 (2)関係機関における学童期以降の発達支援の取り組みの現状及び課題について (3)意見交換 ・学童期以降の発達支援体制のつよみと課題について ・今後の会議で議論するテーマについて	
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開	
	<input type="checkbox"/> 部分公開	[理由]
傍聴者数	2名	
審議結果及び主な意見等	別紙参照	
会議録の作成様式	<input type="checkbox"/> 詳細 <input checked="" type="checkbox"/> 要約	
備考		

担当課	舞鶴市 こども家庭しあわせ課 TEL 68-9155
-----	-------------------------------

# 令和7年度 第1回 舞鶴市発達支援体制検討会議 議事録【要約版】

I.開催日時 令和7年10月30日(木) 14時～16時

II.開催場所 舞鶴市中総合会館

III.出席者(敬称略)

委員:小谷裕実、石黒健太、四方あかね、橋本由紀、金子亜佑美、阪口靖敬  
関係者:楠崇智、内藤信雄、仲川真広、足立典子、梅田めぐみ、村尾茜

IV.目的

出生数の減少と発達に課題を抱える子どもの増加、および家庭環境の複雑化・多様化を受け、現行の発達支援体制の課題を評価・分析し、学童期以降の支援体制の再構築を目指す。

すべての子どもが地域で居場所と役割を持って生活できることを目標とする。

V.議事

## 1.令和6年度 舞鶴市発達支援体制検討会議の報告

昨年度は「就学までの発達支援体制」を検討し、以下の4つの方向性が示された。

方向性	主な取り組みと現状の課題
多様な発達特性への対応	自分らしく生きるための多様な支援体制の整備。
就学前発達支援システムの再構築	<b>今年度、5歳児健診(※園巡回方式)を試行実施。</b> 健診後の支援として、 <b>なかよしルーム(コミュニケーション力・社会性を育み、就学へつなげるための小集団支援)などと連携し、安心して小学校入学を迎える準備につながる体制について検討する。</b> ※保育園や幼稚園などを訪問して実施する方式
切れ目ない支援体制(支援をつなげるしくみの強化)	今年度、 <b>発達支援ファイル(成長記録)の配布対象者・活用方法を明確化し、園や学校と共有した。</b> 園と放課後等デイサービスなどの情報引き継ぎが不十分、保護者や学校への活用方法の周知が課題。
専門職の確保・資質の維持向上	専門的な支援を担う人材の育成と確保。

## 2.学童期以降の発達支援の現状及び課題(関係機関からの報告)

### ①舞鶴市教育委員会

項目	要点
教育相談	● 年間相談件数が160件と増加し、 <b>日程調整や検査員・相談員の確保が困難。インクルーシブ教育との両立や指導の困難さへの対応が課題。</b>
通級指導教室	● 小・中の通級指導教室が2014年度の7学級から2025年度には16学級に増加。 <b>ニーズが高まっており、教員の人材育成が急務。</b>
教育支援センター 明日葉	● 集団適応・情緒の安定・基礎学力補充のため、体験活動を中心に支援。社会とのつながりになっており、学校への復帰が増加したケースも増えた。 <b>訪問型支援など、多様な児童生徒が安心して学べる体制が必要。</b>
現場の支援者の意見	● 多様な特性に対応できる教職員の知識、スキル、経験が不足。 ● 特別支援教育コーディネーターの負担増。 ● 発達支援ファイルの内容・活用方法の周知が不十分。

舞鶴市特別支援教育研究会	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小中学校の特別支援学級担任で構成。小学校、中学校、通級指導と分かれて授業研究会を実施。<b>人材育成の視点から、モデルチェンジの時期。関係機関の発達支援体制の見学や当事者の話を聞くなどの研修が必要。</b></li> </ul>
--------------	---

### ②京都府立東舞鶴高等学校

項目	要点
取り組みの現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 行動面や学習面で困難を抱える生徒に対し、支援教員による授業サポートや、放課後にサポート教室(週1回)で学習支援を実施。個々のニーズにあった学習方法を提供する体制が不十分。</li> <li>● 市内各高校に特別支援教育コーディネーターは配置されているが、制度上、通級指導教室の設置は困難。</li> </ul>
社会的な自立に向けて	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学習面のみならず、<b>社会性の育成も不可欠であり、小・中学校からの縦連携(情報共有)が必要。</b></li> </ul>

### ③京都府立舞鶴支援学校(トータルサポートセンター含む)

項目	要点
支援学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 在籍生徒は、過去最大の181名となり、増加傾向。<b>多職種チーム</b>で、より良い社会の実現及び生活の質を高めるための支援を重点的に行うことで、<b>多角的なアプローチ</b>ができています。一方、学校・放デイ・家庭間等、<b>関係者間での支援方法の統一が必要だが、連携するための時間の確保が困難。</b></li> <li>● 家族支援として入学前説明会や入学後面談を実施しているが、学校が家庭の中に入って支援することは少ない。</li> <li>● 就労に向けて発達支援ファイルは重要だが、挟む内容・活用方法が不明確で十分活用されていない。また、<b>情報が一元管理されていないため、アクセスしにくい。</b></li> <li>● インクルーシブな学校運営、モデル事業を受託。交流及び共同学習の発展、空き教室を活用した拠点づくりについて検討中。</li> </ul>
トータルサポートセンター	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育相談は昨年度249件。新規相談は数カ月待ちと、<b>即時対応及び継続支援が困難。</b></li> </ul>

### ④京都府立舞鶴こども療育センター

項目	要点
診療の現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 再診患者の増加により、<b>新規患者の受け入れが厳しい状況。</b>このため、頻回な再診を必要としなくても安心して生活できるように、学校や園とのオンライン連携カンファレンスなどを通じて、現場での支援体制整備に努めている。</li> <li>● <b>心理カウンセリング、発達検査の予約が厳しい状況。</b>特別児童扶養手当等の申請に必要な診断書作成のために、発達検査に時間を割いており、教育相談等で実施された<b>発達検査結果の共有システムの整備</b>が望ましい。</li> <li>● <b>青年期から成人診療科への移行が難しい</b>(高校のうちに、精神科に徐々に移行していきたいが、20歳以上から受診となる精神科が多い)。</li> </ul>
放課後等デイサービス	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 送迎がないため、保護者が送迎できる舞鶴市内の方のみに限定し、グループでソーシャルスキルトレーニングを実施。現状の取り組みは効果的であり、今後発展させていきたい。</li> </ul>

自己理解・二次障害予防の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>療育のゴールは「自分の取り扱い説明書」が自分の中にできること、それは過大でも過小でもなく等身大の自分を理解し、困難にあっても対処方法を知っているという状態になること、と本人や保護者に伝えている。</li> </ul>
------------------	---

### ⑤福祉サービス

項目	要点
放課後等デイサービス	<ul style="list-style-type: none"> <li>市内10カ所（療育センター含む）。お子さんの特性を活かしつつ、療育、家族支援を実施。</li> <li>特別支援学校や特別支援学級の児童・生徒数増加に加え、保護者の就労やレスパイトのニーズが高まっていることから、利用希望者は増加傾向にある。</li> </ul>
放課後の居場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>日中一時支援事業等を行う施設は市内1カ所のみと、<b>放課後等デイサービス以外のこどもの居場所が不足</b>しており、放デイに利用希望が集中。結果、積極的に放デイの周知ができず、正しい認識が不足。</li> </ul>
相談支援員	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>相談支援専門員の不足</b>により、障害児通所支援受給者に占めるセルフプラン率が増加し、<b>専門的視点の不足やモニタリング機会が減少</b>。また、<b>本来相談支援専門員が担う役割の一部を事業所がサポートしており、放課後等デイサービス事業所の業務が増加</b>。</li> </ul>
情報連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>就学・進学時の切れ目のない移行支援のための連携体制が不十分（情報共有と引き継ぎ）。</li> </ul>

### 3. 現行の発達支援体制の強みと課題に関する意見交換

テーマ	意見の要点
放課後の居場所づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>放課後等デイサービスは定員に限りがあり、「<b>放課後の預け先がない</b>」ことが壁になり、保護者が転職せざるを得ない状況もみられる。福祉サービスに限定せず、<b>地域での居場所や、学校統合の動向も考慮した広域的な居場所づくりの検討が必要</b>。</li> <li>共働きの増加などにより、支援学校のバス停までの送迎が保護者の負担となっている。また、体調不良等で保護者がバス停まで送迎が出来ない場合欠席につながり、<b>保護者のレスパイトやこどもの教育の保障に向けた検討が必要</b>。</li> </ul>
親の会	<ul style="list-style-type: none"> <li>れいんぼう(自閉症の方が対象、作品展・バス旅行・ペアレントメンター)や、もくよう会(対象者の限定なし、約50家族が参加、季節のイベントやおしゃべり会)、支援学校の親のための応援塾(体験談や悩みを共有)といった親の会が存在している。</li> <li>特別支援学級の親の会は、参加率が低下したため解散し、新たなつながりづくりを模索している。</li> <li>共働き家庭の増加などで、<b>保護者同士のつながりの場が持ちにくくなっている</b>。</li> </ul>
境界知能※の子どもたちへの支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校まで一般校に通い、高校から支援学校に進学した際に大きなギャップを感じ、自己肯定感が低下するケースがある。</li> <li>支援学校と一般の高校とで、教科学習の内容が異なるため、このギャップを埋め、<b>個々の理解力に応じた学力をつける教育が必要</b>。</li> </ul> <p>※境界知能とは、知的障害とは診断されないものの、平均よりも学習や社会生活に困難を抱えやすい状態をさす</p>

<b>教員の資質向上</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小中学校の教員が、<b>就学前から就労までの長いスパンでの子どもの実態把握が難しい。</b></li> <li>● 先を見据えた支援を行うためには、こどもの育ちには様々な機関が関わっていることについて把握し、<b>こどもの進路や生活実態等からサポート体制を考えられる教員研修の充実が必要。</b></li> </ul>
<b>情報連携・ファイル活用</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● にじいる巡回相談は支援へのきっかけとして利用しやすい反面、相談後に発達支援ファイルを渡すと、保護者が子どもの状況を重大と捉えて不安や戸惑いを感じるケースがあるため、相談利用の敷居を上げないよう、ファイルの渡し方に配慮が必要。</li> <li>● <b>発達支援ファイルをデジタル化（情報の一元化）</b>し、保護者がID/パスワードで管理し、保護者の承諾を得て関係機関が必要な情報（履歴、計画）を閲覧できるシステムを検討すべき。</li> </ul>
<b>意思決定支援</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 支援において、<b>本人の気持ちを最優先</b>する「意思決定支援」の視点を重視する必要がある。</li> </ul>
<b>インクルーシブ教育</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小・中学校のインクルーシブ教育※は、多様なこどもが、1つの学級で同じカリキュラムで学ぶ中で、合理的配慮や評価等、個々への対応について検討が必要であり、実践のあり方を模索している。</li> <li>● ハンディキャップを持つこどもが、将来その能力を活かして活躍するには、就労までを見据えた教職員の研修が必要などところもある。</li> </ul> <p>※多様な子どもたちが共に学ぶ仕組み</p>
<b>学童期を見据えた幼児期の支援</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 幼児期には、学童期移行の関わりのねらいを踏まえながら、人格の根っこになる部分を育くみ、将来につながる力を作っていくことを意識している。</li> </ul>

#### 4. 第2回目以降の会議で議論するテーマについて

- 委員の意見を踏まえ、以下の4つのテーマに絞り、次回以降の会議で議論を深めることとなる。
  1. 切れ目ない支援体制
  2. 子どもを取りまく支援者の資質向上
  3. 本人・保護者とともに
  4. 連携と適切な役割分担
- 小谷会長から助言：
  - 舞鶴市は保育、医療、福祉、教育の資源が整っている一方で、それぞれの現場が十分に機能し、社会の変化に対応した「持続可能な体制」になっているかを、検証することが重要である
  - 次年度から本格実施される5歳児健診体制が整った今、上記4テーマが試される時である。
  - **【切れ目ない支援体制】**:情報の一元化（デジタルトランスフォーメーション）も含めて、持続可能で達成可能な支援体制を検討すべき。
  - **【資質向上】**:後継者不足に対応するため、個人の努力ではなくシステム作りが急務。また、支援学校の卒業生など、当事者の声を聞く機会を設けるべき。
  - **【保護者支援】**:保護者に対する支援に加え、サポーターや地域で中核となる保護者が必要。
  - **【適切な役割分担】**:ニーズのない事業の見直しと再構築や役割の統廃合も検討すべき。
- 次回会議のテーマ：
  1. 切れ目ない支援体制
  2. 子どもを取りまく支援者の資質向上